

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：13903

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00629

研究課題名(和文) 歴史統語論・一般言語学的観点から見た日本語主語表示体系の歴史的变化

研究課題名(英文) Historical Changes in the Japanese Subject Marking System from the Perspective of Historical Syntax Changes and General Linguistics

研究代表者

金 銀珠 (KIM, Eunju)

名古屋工業大学・工学(系)研究科(研究院)・准教授

研究者番号：60547496

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、無助詞と「の」と「が」による日本語主語表示体系の歴史的發展について統語的な側面の構造面に注目しながら明らかにした。日本語主語表示形態の歴史的發展は「の」と「が」ではなく、無助詞と「が」の競り合いが目立つ点をデータ分析によって明らかにし、「星が丘」のような連体格助詞として使われることが多かった「が」が、主語表示形態(雨が降る)として無助詞を超えて勢力拡大出来たのは、無助詞より構造が小さく、文中に主語の係先の区切りを作ることが主な要因であったことも明らかにした。この解明の過程で、連体形終止の一般化および準体法の衰退に関しても、新たな展開と展望を示すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本語主語表示体系の史的変遷について、従来の研究では「の」と「が」の比較が主に行われており、また古代語から現代語までの変化を通観した論はなかった。本研究により三形態の構造面の歴史的变化の様相およびその関わり合いが明らかになった点は、大きな成果と言える。この過程で、日本語の主要な史的变化の一つである連体形終止を形態ではなく、「構造変化」の観点から「連体形述語」の構造の一般化として捉えたことは、今後の史的変遷の研究において新たな視点と展望を提示したものである。

研究成果の概要(英文)：This study elucidates the historical development of the Japanese subject marking system, focusing on the structural aspects from a syntactic perspective, particularly the use of zero particles, 'no', and 'ga'. Data analysis reveals that the historical evolution of Japanese subject marking forms is characterized by the competition between zero particles and 'ga', rather than 'no' and 'ga'. It was also revealed that 'ga' was able to expand its influence as a subject marking form (as in "ame ga furu"; "it rains") beyond zero particles primarily because its structure is smaller and it creates a clearer demarcation of the subject within the sentence. Additionally, this process sheds new light on the generalization of the rentaikei-shuushi (attributive form ending) and the decline of the jun-taiho (quasi-substantive form).

研究分野：日本語学，日本語文法変化，歴史統語論

キーワード：主語表示 無助詞 構造変化 準体法 連体形述語 終止形述語

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本語構文史の主要な展開として、「雨 降る」のような無助詞構文から「雨が降る」のような主語標示構文への変化が挙げられる。しかし、従来の研究では主語表示体系の歴史的变化について、「雨が降る」「雨の降る(日)」のように「の」と「が」で主語表示する場合の比較に注目が置かれ、古代語の主要な主語表示形態である無助詞で主語表示する場合は、さほど考察の対象にされてこなかった。

(2) 従来の研究では、統語的な構造面における日本語主語表示体系の史的变化と、変化を促した原動力については、未解明のままであった。無助詞を含めて、無助詞と「の」と「が」の三形態の変化を考察したものは殆ど見られなかった。

2. 研究の目的

(1) 歴史統語論的な観点から、無助詞と「の」と「が」が主語を表す例を対象にし、平安時代から現代までの構造面の変化に注目しながら、三形態の歴史的發展と、変化を促した原動力について明らかにする。

(2) 一般言語学的観点から、日本語主語表示体系の変化に見られる共通点・相違点について明らかにする(これに関しては、新型コロナウイルス感染症の世界的流行の時期と研究課題年度が重なってしまい、他言語資料および論文などの収集がままならず、今後の課題として残されている。)

3. 研究の方法

(1) 平安時代から現代までの言語データから、無助詞と「の」と「が」が主語を表す例を地の文と会話文に分けて収集し、三形態の史的变化とその関わり合いについて分析した。

使用テキスト：源氏物語、1000年頃、宇治拾遺物語、1220成立、平家物語、1250成立、徒然草、1336成立、天草版平家物語、1592刊、近松門左衛門集：冥途の飛脚 1711・女殺油地獄 1721、春色梅児与美、1836、浮雲、1887-1891、白夜草紙、1975【岩波旧日本古典文学大系 / 小学館新編日本古典文学全集 / 国立国語研究所日本語史研究用テキストデータ集 / 金港堂 / 文芸春秋】

(2) 統語的な側面から構造面の変化を見るため、主語と述語の間に介在する従属節の種類と注目し、平安時代から現代までの無助詞と「の」と「が」の史的变化と三形態の関わり合いについて、分析した。

使用テキスト：上記(1)同様。

(3) 現代語の主要主語表示形態として定着している「が」について、「が」が勢力を拡大していく際に、主語として受ける語の統語構造の偏りと、「が」が係っていく述語の偏りがどのように解消されていくのかのプロセスについて、奈良時代から中世末までの言語資料を実証的に分析した。

使用テキスト：奈良時代『万葉集』(7c後-8c、後山口大学万葉集データベース)、平安時代から中世末までは、上記(1)の使用テキスト ~

4. 研究成果

(1) 主語表示「が」に係る述語の偏りの解明

本研究では、上代から中世にかけて、主格助詞「が」の述語がどのように拡大したのかについて考察し、主格助詞「が」の述語は「活動 位置変化 状態変化」を表す語へと拡大したことを明らかにした。述語の拡大のプロセスは外界の世界を言語化する際の認知の仕方である行為連鎖のプロセスと類似する。また、「が」の本来の機能である「指示」機能を基盤として新情報提示用法や談話的際立ちの用法に拡大したものと考えられた。「が」に係る述語の通時的な広がり、現代語の説明で外界の世界を言語化する際の認知の仕方として設定されている行為連鎖のプロセスと類似する点は、興味深いと言える。

(2) 主語表示「が」と準体法の関連の解明

古代日本語の主語助詞「が」は、現代語の「雨が降る」のような名詞句に後続する用法だけではなく、「～と言ふがあやなき」のように活用語の連体形に後続して主語を表す用法があった。活用語の連体形が体言のように振る舞う用法(準体法)は、歴史的变化の中で特定の言い方を除

いて消滅した。準体法の消滅は日本語文法体系の主要な変化として注目されてきた。

本研究では、これまでに注目されてこなかった、準体法の消滅が助詞「が」が主格助詞として確立していく際に、どのような影響を与えたのかについて上代から中世末を対象にして考察し、連体形を主語として受ける「が」の用法が衰退するのと時期を一緒にして、「雨が降る」のような名詞句に接続する助詞「が」の前接語の構文構造と前接語の幅が拡大していくことを確認した。名詞句に後続する「が」は主に「われ」「清盛」のような直接指示をする語類に接続していたのが、連体修飾という構文的手段による指示をする語類に拡大し、「こと」のような形式名詞を前接語に取るようにもなった。また、新情報提示用法を中心とした存在動詞を述語として取るようにもなった。このような変化は、連体形に接続して主語を表す「が」との影響関係が機縁で起きたものではないかと推測される。従来の研究では、助詞「が」が平安期を経て中世末までには無助詞や「の」より勢力を拡大し、日本語の主要な主格助詞としての地位を獲得していることが報告されている。しかし、現象の整理にとどまり、変化を促す具体的な継起性の説明には乏しい所があった。本研究の成果により、日本語文法の主要変化の一つとして注目されてきた準体法の消滅が主格助詞「が」の拡大と関連している可能性が示唆された。

(3) 無助詞と「の」と「が」による主語表示の歴史的展開の解明

従来の研究では、「の」と「が」を比較する論考が多かったが、日本語主語表示形態の歴史的展開は「の」と「が」ではなく、無助詞と「が」の競り合いが目立つ点をデータ分析により明らかにし、「星が丘」のような連体格助詞として使われることが多かった「が」が、主語表示形態（雨が降る）として無助詞を超えて勢力拡大出来た理由について明らかにした。データ分析により論証した点は、次の～である。【無助詞は文中の主述関係の区切りが不明瞭な「終止形述語」の大きい構造を成し、ノとガは主述関係の区切りが明瞭な「連体形述語」の小さい構造を成している。中世末頃までは構造の大きさにより、無助詞が従属節と主節、ノが連体節と準体節に偏って用いられている。中世末以降、ガが無助詞を超え、勢力拡大出来たのは、連体形述語の小さい構造により、文中に主述関係を示す区切りが出来たことが主な要因と見られる。ヒト・モノ準体の衰退が、ノが連体節においてなお、主語表示の役割を維持している要因の一つと見られる。】

(4) 準体法の史的変遷に関する新たな展望の提示

上記(3)の解明過程で、日本語の歴史変化の主要なテーマの一つである準体法の衰退様相について、従来の研究では考察されてこなかった準体節と連体節と関係を検討したことにより、準体法の史的変遷について、新たな展望と言語変化の様相を明らかにした。

従来の研究では、「女の髪長き」「紙の色深き」のような準体節は、「(女の)髪長いの」「(紙の)色深いの」のような準体助詞「の」を付加する語法へ変化したともとされてきた。しかし、本研究では、古代語における「人の髪長き」「紙の色深き」のようなヒトやモノの属性または状態を表す準体節の用例が中世末頃になるとほとんど見られなくなり、反対に、「髪の長い女」「色の深い紙」のような連体節が中世末以降、大幅に増加することをデータにより明らかにした。両者が逆方向に動いており、ここから、「人の髪長き」「紙の色深き」のようなヒトやモノの属性や状態を表す準体節が衰退していく中で、これらは、「髪の長い人」「色の深い紙」のような連体節の表現に移行した部分があると論じた。従来の研究のように、「人の髪長き」が「(人の)髪長いの」のように準体助詞ノを付加する方向へ移行したと論じるのは、準体法の変化の一側面であって、準体法の変化そのものとは言えない。特に、ヒトやモノの属性や状態を表す準体節の衰退は中世末までにある程度進行していると見られるが、準体助詞「の」が一般化するのには、近世後期であるとされ、準体助詞「の」の一般化を待つまで数百年間の時間的開きが見られる。ヒトやモノの属性や状態を表す準体節が、準体助詞「の」が一般化するまでただ衰退を続けた、と考えるのは不自然な言語変化の想定である。また、ヒト・モノ準体は、「人の髪長いの」「紙の色深いの」のような準体助詞「の」を付加する構文より、「髪の長い人」「色の深い紙」のような連体節にする方法がより一般的である。特に、人を表す場合は、「髪長いの」のような準体助詞ノを付加する方法は、現代語ではぞんざいなニュアンスを伴うため、避けられる。最後に、従来の研究では、準体法を引き継ぐ語法への変化に焦点が置かれていたが、連体修飾構造全体の中の機能という所に焦点を当てると、準体法は必ずしも準体法を忠実に再現している語法に引き継がれなくてもよい。以上の～のことより、ヒトやモノの属性や状態を表す準体節は連体節に移行した部分があると論じた。

(5) 準体法の衰退時期の見直しと新たな展望

本研究では、準体法の衰退時期に関する議論を言語データの分析から見直し、新たな展望を提示した。従来の研究では、準体法の衰退時期と関連して、主に、二つの異なる立場が存在する。一つは、衰退次期が院政期～中世末と見る論で、もう一つは、近世後期～近代と見る論である。本研究では、上記(4)のように準体節と連体節の関わりについて考察する中で、「人の髪長き」「紙の色深き」のようなヒトやモノの属性や状態を表す準体節が中世末までには衰退していることを明らかにし、言語データから前者の立場を実証した。これにより、準体法の衰退様子を明らかにするには、連体修飾構造全体における機能の組み換えの史的変遷を考察する必要がある

ことが明らかになった。

(6) 連体修飾節に主格助詞「の」が残る理由の解明

現代日本語の主語表示は、「髪が長い」「髪が長い人」「髪が長ければ」のように主にガで示されるが、連体節では「髪の長い人」のように、「の」でマークされることがある。従来の研究においては、なぜ連体節においてだけ「の」が主語表示助詞として残っているのかについて論じられてこなかったが、本研究では、「人の髪長き」「紙の色深き」のようなヒトやモノの属性や状態を表す準体節が衰退し、「髪の長い人」「色の深い紙」のような連体節の表現に移行した部分があることを明らかにし、これにより、「髪の長い人」のような連体節に残る「の」は「人の髪長き」のような準体節が衰退し、それを補う形で現代語に残っている部分があることを明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 金銀珠	4. 巻 20-1
2. 論文標題 無助詞・「ノ」・「ガ」による主語表示の歴史的展開—平安から現代までの構造変化に注目して—	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 日本語の研究	6. 最初と最後の頁 52-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金銀珠	4. 巻 95
2. 論文標題 古代日本語の主格助詞の変化 平安～中世までを対象に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本語文学	6. 最初と最後の頁 23-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18704/kjll.2022.12.95.23	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 金銀珠	4. 巻 106
2. 論文標題 「主格助詞「が」の構造変化 近世～現代まで」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 韓国日本学会国際学術大会proceedings	6. 最初と最後の頁 11-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金銀珠	4. 巻 第11回
2. 論文標題 準体法の衰退 連体節との関連から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 第11回国際学術大会・韓国日本研究総連合会proceedings	6. 最初と最後の頁 31-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金銀珠	4. 巻 113
2. 論文標題 主格助詞「が」に係る述語の拡大：上代から中世までを対象に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 名古屋大学国語国文学	6. 最初と最後の頁 108-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18999/nagujj.113.122	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 金銀珠
2. 発表標題 無助詞「の」「が」の歴史的展開 平安～現代までの構造変化に注目して
3. 学会等名 名古屋言語研究会第193回
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 金銀珠
2. 発表標題 準体法の衰退 連体節との関連から
3. 学会等名 第11回国際学術大会・韓国日本研究総連合会（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 金銀珠
2. 発表標題 「主格助詞「が」の構造変化 近世～現代まで」
3. 学会等名 韓国日本学会第106回国際学術大会（国際学会）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 金銀珠・藤田保幸・小田勝・江口正他	4. 発行年 2022年
2. 出版社 和泉書院	5. 総ページ数 520
3. 書名 中部日本・日本語学研究論集	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------